
311 ノート（仮）

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

311ノート（仮）

【Nコード】

N5541T

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

私の住んでいる街には、いつも煙を吐き出している工場がある。
24時間365日休むことなくたちのぼる煙、その姿を見ながら育ってきた。

しかし、その日、その時、その煙が消えた

3月11日からのこと。一部、自分のブログから引用。半フィクション

3月11日：その日、その時。
宮城県I市某所。

私の住んでいる街には、いつも煙を吐き出している工場がある。
24時間365日休むことなくたちのぼる煙、その姿を見ながら
育ってきた。

しかし、その日、その時、その煙が消えた

2011年3月11日。

その日、私は少し遅い昼を食べ、コタツの中でまどろんでいた。
季節的には、春とはいえ、まだ寒い東北。こたつのぬくもりは、
午後のまどろみを誘うのに十分である。

14時46分。

その時、世界が軋んだ。

電灯は天井にぶつかるかと思うほどに揺れ、引き出しは勝手に開
き、積まれた本や食玩はあっという間に散乱した。

すべてが揺らぎ、
すべてが崩れ、
すべてが狂っていく。

全てのものが入り混じり、世界の不確定性^{エンタローピー}が増大した。

脳裏に浮かぶは宮城県沖地震。

もの心ついた頃から、必ず来ると言われ続けてきた地震だからだ。
強い地震がきたら「これは宮城県沖地震か！」と思うほどに、心の
深くまでしみついている。

長く感じた揺れがひとまず収まり、私はテレビをつけようとした。
しかし、リモコンのスイッチを押しても、テレビに反応は無かった。
電気が途絶えたのだ。

電気がないため、もちろんPCでネットにつなぐこともできない。
情報を得る手段がなかった。

私は部屋を見回した。
部屋は散乱したが、窓ガラスが割れることもなく家自体は無事であつた。

近所の様子を見ても、崩れている家は無かった。
あんなに揺れたけれど、思っていたよりも建物の被害は少ないかもしれない。

本震よりも強い余震は基本的にはない。

近くに海や川はないし、崩れるような山も崖も無い。自宅は鉄筋で骨を作った家だし、あの揺れで家が無事だったのだから、ひとまず避難所へは行かなくとも大丈夫だろう。

とにかく家の片づけを本格的にやり始めた。あまり開けない窓の立てつけがより悪くなったことと、いくつか食器が割れた事が家でおきた被害であった。

しかし頻繁に揺れるので、片付けはあまりはかどらない。もうすこしおさまるまでじっとしていたほうがいいかもしれない。

そう思い、防寒の毛布を準備し、まだ温かいこたつで温めた。

電気はいつ回復するのだろうと、その時は軽い気持ちでいた。

しかし、日が暮れても電気は戻らず、薄暗い懷中電灯の明かりの中、時々来る強い余震におびえながら、眠れぬ夜を過ごすことになった。

3月12日　：煙が消えていた。

ライフラインが寸断され、何もできない夜が開けた。

相変わらず電気が来ないので、詳細な何も情報がない。津波が来たらしいと言ふことは知ることができたが、自分たちの地区の状況の把握もままならなかった。

給水車が来ていると言うので、6時間並んで水を手した。
3月も半ばと言うのに、とても寒い日だった。

私は、ふと空を見上げた。

何か物足りない感じがした。

それもそのはずである。

いつもそこに見えている煙が見えなかったのだ。工場の煙がまとっていたのだ。

ほんの些細なことなのだが、日常が消えてしまったのだと、その時に強く感じた。

地震2日目、全く復旧せず、真っ暗な2度目の夜を迎えた。
星が、だいぶあかるい。
あんなに明るいものだったのか。

3月13日：ここは、どこだろう？

暖かい昼間。

日曜日ということもあって、本来ならば気軽な散歩をするのには
丁度良い日和。

私は少しだけ、歩いてみようと思った。

ひび割れた道路をかき分けて、人影のない灰色の景色の中を歩く。

そこで何が起きたのか分からなかった。

そこは、歩いていける距離なのだ。

20分もかからない場所なのだ。

私とその堤防のように少し盛り上がった道路を超えた時は、何がそこで起きたのか分からなかった。

広がっていたのは、濡れた大地。

田植えの季節でもないのに、水の張られた耕作地。

泥にまみれたごみが、道路に打ちあがっている。

東へ進めば進むほど、押し流された残骸が瓦礫が増えていく。

大量の流木、自転車、ビニールハウスが、犬小屋が、……が。

私は、引き返した。

これ以上先に進む勇氣はなかった。

視界の先には、屋根や自動車、ばらばらと積みあがり、地形を変えている一帯が映っている。

それは水の勢いが、重いものを運べなくなり、内包していたものを落としていく場所。

あの向こうにあるのは、きっと地獄だ。

まだ、行くべきではない。

まだ、私は覚悟していない。

まだ、これ以上の惨劇を受け入れたくない。

私は、引き返した。

今日もまた日が暮れる。

全く復旧しないまま、3日目の暗い夜を迎えた。

3月14日　：並ぶ列。

店の大半は休業したままで、営業している店を探すのが難しい。

いつくるとも知れない物資。

いつやってくるかも分からぬ余震。

道路に並ぶ自動車の列。

それはガソリンスタンドに並ぶ者たちのもの。

ガソリンスタンドの看板は、私の視力では見えないほど遠くにあり。
る。

いつたいどこのスタンドに並んでいるのだろうか？

店の入り口に並ぶ列。

開いていた近くの店の商品棚は、すでにからっぽだった。

カップラーメンは1000円だった。

だれが買うのだろうか？

だれも買わないから、こうやって今も残っているわけだが。

特に何も買えるものがなかったので、近くの中学校へ行きプール
の水をもらって帰る。この水は、トイレを流す時に使うのだ。

この頃になると長時間並ばなくとも、給水車から水がもらえるよ
うになってきた。とは言うものの、貴重な飲み水はトイレに流すと
言った、そんなことに使いたくないのだ。

3月15日　：食べ物のことばかり浮かぶ。

冷蔵庫が止まっていたため、地震から2、3日は、痛みやすいも
のや、自然解凍しはじめた食品の中で、あまり調理しなくても食べ
られるものを食べていた。

冷蔵庫は開け閉めを頻繁にしなければ、夏の沖縄で12時間は持
つ。雪国なんかでは、凍るのを防止するために冷「蔵」庫に入れる
こともあるくらいなのだ。

冷蔵庫の断熱性を馬鹿にしちゃいけない。

今は、そうめんや缶詰と言った保存食ばかり食べている。
（パスタや米は、水も使うし、時間がかかりすぎて、ガスも無駄に
使いすぎるので、気軽に手が出せない）

なんというか、新鮮な？菓子パン食いたい。

3月16日　：水道施設のありがたみ。

毎日の水汲み、買出し、たまにくる余震……風呂がないこと以外
は、まあ慣れてきた。

人間の適応能力は、やっぱりすごい。

小耳に挟んだ情報によると、下水の処理場は海岸沿いにある津
波にのまれているので、元通りになるには、しばらくかかるらしい
と聞いた。

つまり、上水が復旧して水が出るようになって、下水処理が追
いつかないことになる。マンホールから汚水があふれないようにす
るために、しばらく節水を心掛けなくてはいけないようだ。

仮設の処置として、簡単な消毒をして流しているらしいが、これ
からの季節、暖かくなってくれば、少し匂うようになるかもしれな
い。病気が流行らなければいいが。

3月17日　：津波の被害を知る。

インターネットが復旧。

そして、動画を見た。

誰かが仙台空港を撮影したやつと、どこかの局が名取川辺りの上空で津波をリアルタイムで撮影していたやつ。

警報が太平洋側全部覆う勢いだったことも、初めて知る。

地震後、すぐに停電になったので、そんな情報は知らなかったのだ。

津波は、まるで洪水のように、しかし、すさまじい破壊力を持って、景色を飲み込んでいく。

火をまとった津波が……

見知った風景が津波の下に……

見知った風景のはずなのに……

見知った場所なのに、そこがどこなのか分からなくなっていく。

ある程度視聴し終わって、祖母と母に仙台空港が津波に飲まれたという情報を話す。信じられないようだった。

海から離れたあの空港に津波が来たのは、自分も信じられなかったから、その反応はよくわかる。

電気が復旧してテレビをつけても、自分たちのほしい情報は皆無。同じようなことばかり。

テレビから地元の情報が得られない。まるで、忘れ去られてしま

ったかのよう。

だから、私はテレビなんて見ないでネットで情報探している。

ああ、仙台へ行けるような手段があれば、風呂にも入れるのに。自転車で行こうにも季節的にまだ寒い。途中で冷えてしまつたろう。

それに、家には祖母もいる。歩いて行ける距離でないと、なお難しい。ガソリンが残り少ないから、自動車では無理なのだ。

あ、明日開く予定の店情報、発見。行ってみる価値はありそうだ。

3月18日　：備えあれば憂いなし。

空に救援物資を運んできた輸送機の音が響く。

仙台空港が近くにあるので、飛行機の音がたまに流れてくるのだ。管制官も不在、照明もない空港に夜も昼も着陸するのは、すごいと思った。

自衛隊には、感謝の気持ちでいっぱいだ。

今回の地震で分かったことは、日本の半分ちかくが地震で被災しても、ほとんどの場所で1週間も経たないうちにいずれかのライフラインは回復するし、まあ何とか物資は届く。

今回の教訓は「備えあれば憂いなし」だね。

今年の漢字は「備」にしようよ。

3月19日　：初午大祭。

本来なら、近くの稻荷神社で初午大祭がある時期である。

もちろん、みこし行列は中止されたが、境内にはいくつかの露店がならび、休憩所の食堂も営業していた。

祭りの準備してきたものが、震災のために役立つことになるとは

……

神社の参道に建てられた石塔は倒れていたが、何百年もそこにある街を守ってきた建築物はどうとうとあった。

屋台の前に並ぶ。

ここ数日で、もう見慣れた風景。

しかし、湯気の立ちこめる屋台、これはいい。

調理された温かな食事は、とても暖かくいいものだ。

いつもみたいなお祭りはできないけれど、きっと稻荷様も見守っているね。

3月21日　：パンの缶詰とカレーライス。

不定期ながら営業するお店が増えてきた。選り好みしなければ、

店で何かは買えるようになった。

最寄のスーパーでは、ニンジン、ジャガイモ、タマネギが、一人辺りの個数制限なく買えるようになっていた。

肉は入手できなかったけれど、今夜はご飯をたいて、ちよつと豪華にカレーライスをつくるのもいいかもしれない。

そして、パンの缶詰を入手した。

ちよつとだけ、テンションが上がる。

パンが缶詰に入っているなんて！

パンの缶詰を生まれて初めて食べた。

当たり前だけれど、缶の中身は間違いなくパンだった。

なんというか、食べ物のことばかりだね。

3月23日　：そして、いつものように煙がのぼっていく。

工場の煙が再びのぼる。

確かに、いつもと変わらぬ煙がのぼっていた。

空はどんよりとした暗い空。

曇った灰色の空と同じ色の煙は、すぐに溶けて風景に消えた。

しかし、それでも煙は確実に空へのぼっている。

街は、まだまだ騒がしい。

しかし、私の日常があゝの煙のように、その風景に違和なく溶け込む日も、もうすぐかもしれない。

気がつけば、梅の花が咲いていた。

そして、もうすぐ桜も咲くであろう。

時間は、月日は、季節は、確実に刻み続けている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5541t/>

311ノート（仮）

2011年7月9日09時02分発行